

# 仏教実践に見られる平地民と山地民の民族間関係 中国・ミャンマー国境地域におけるタイ族とタアーン族の事例から

小島敬裕

こじま たかひろ / 京都大学地域研究統合情報センター研究員

中国・ミャンマー国境地域のタイ族とタアーン族は、盆地の平地部と周辺の山地部に分かれて居住しながらも、様々な関係を築いてきた。ここでは上座仏教の実践に見られる民族間関係に焦点を当てて紹介する。

## タイ族の村の寺院に住む

### タアーン族女性修行者

筆者は、1999年から2003年にかけてミャンマーで生活した後、2005年までミャンマーの上座仏教と国家の関係について研究を行った。その後、中国側にフィールドを移し、2006年から2007年にかけて、雲南省徳宏傣族景頗族自治州瑞麗市のタイ族農村T村で1年あまりを過ごした。瑞麗市の位置するムン・マーウ盆地は、その中央部を流れる瑞麗江にほぼ沿って中国とミャンマーに分かれており、国家の周縁部における仏教実践のあり方を調査するには絶好のフィールドだったためである。

調査を始めて驚いたのは、T村の寺院には僧侶が居住せず、ミャンマー側のナムカム郡出身のタアーン族女性修行者のみが4名、境内に居住していたことである。国籍も民族も異なる女性修行者が村落の寺院を管理する状況は、筆者にとって理解しにくいものだった。

一つの理由は、ミャンマーでは村落の寺院に必ず出家者が居住しているためである。これに対し、T村の寺院に居住するのは女性修行者であり、タイ語でラーイハーウと呼ばれる。ミャンマーでティーラシンと呼ばれる女性修行者と同様にピンク色の布を着用し、剃髪して修行生活を送るが、出家者とはみなされず、あくまで在家信徒と位置づけられている。

もう一つの理由は、ミャンマーの村落寺院では基本的に、村人と同民族の僧侶が住職を務めるためである。タイ族は、漢語では傣族、あるいは他地域のタイ族と区別して徳宏傣族と呼ばれる。彼らは盆地の平地部に居住し、おもに水稻耕作を営んでいる。日常会話で使用する言語は、タイ国の主要民族やマン



T村の寺院境内に居住するタアーン族の女性修行者たち。



T村の寺院で受戒した女性修行者。髪を切られながら心細くなり、涙を流している。断髪する二人は、先輩の女性修行者で、そのうちの一人は彼女の叔母にあたる。切った髪を白い布で受け止めている女性たちは、施主となったT村の村人である。

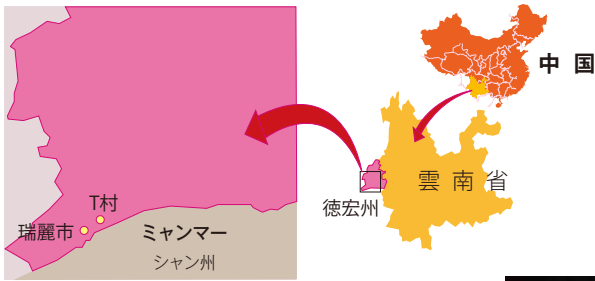


T村の葬式で誦経する女性修行者。

マーのシャン族と同系である。一方のタアーン族は、漢語では徳昂族と呼ばれる。彼らは盆地を囲む山中に住み、中国側では現在、畑作を営んでいるが、ミャンマー側では茶の栽培で知られる。日常的に使用する言語は、ミャンマーのパラウン族と同系（モン・クメール

系）である。

このように両民族は、山地と平地に分かれて居住しながらも、ミャンマー側ではタアーン族がタイ族に茶を販売し、タイ族から米や日用品を購入する関係が成立してきた。また1970年代頃までは、茶摘みの時期になると



タイ族の村の寺院で住職を務めるタアーン僧。



摘んだ茶葉を乾燥させる女性たち。



ミャンマー・シャン州ナムサンにあるタアーン族の村。



中国側のタアーン族の村。

タイ族がタアーン族の村へ出稼ぎに行っていたという。中国側でもタアーン族が作った農作物をタイ族の市場で売るといように、生業を通じた関係が結ばれてきた。タアーン族がタイ族とともに上座仏教を信仰するのも、歴史的にこうした関係が築かれていたためであろう。

また同民族間の日常会話では各民族語が使用される一方で、ムン・マーウ盆地では1950年代までタイ語がリング・フランカとして通用していた。しかし1960年代から70年代にかけて、ムン・マーウ盆地内のリング・フランカがそれぞれの国語、すなわちミャンマー側ではビルマ語、中国側では漢語に替わった。そのためタアーン族の女性修行者がミャンマー側から中国側へ移住した場合、タイ語または漢語の習得から始めなければならない。こうした言語や国家の境界を越え、なぜ彼女たちはT村に移住してきたのだろうか。

### タイ族の村に招かれた経緯

最初に女性修行者たちがT村を訪れたのは、1988年のことである。彼女たちは、ミャンマー側のタアーン族の村から、女性修行者の少ない中国側のタイ族の村々へ米の寄進を集めに出た。たまたまT村の仏塔境内に宿泊した際、そこに居住していた高齢のタイ族女性修行者から同居を要請された。そのため彼女たちはナムカム郡からT村の仏塔境内へ移住し、その後1996年に、仏塔に隣接する寺院に転居した。T村の寺院には、1958年までは出家者が居住していたが、大躍進運動が開始されると彼らはミャンマー側へ逃亡し、文化大革命中には寺院そのものが破壊される。寺院は1984年に再建されたが、当初は「無住寺」で、女性修行者が住んだ方が管理しやすいこともあり、T村の村人たちは彼女たちを受け入れた。

瑞麗で「無住寺」は珍しくない。2009年現在、瑞麗市内には仏教関係施設が118存在するが、そのうち出家者や女性修行者が居住するのは29寺院のみである。118のうちにはタアーン族の村の6寺院が含まれているが、すべて「無住寺」である。また住職がない寺では、女性修行者が管理するケースも見られる。2009年に筆者が行った調査によれば、瑞麗市内に女性修行者は13寺院に20名が居

住していたが、興味深いのは、そのうちタアーン族が6寺院に12名と、タイ族より多数を占めていたことである。タイ族の村人たちに尋ねると、タアーン族は正直で、寺院内の物品が紛失することもなく、もともと山住みの民族であるため労苦を厭わずに寺院境内を掃除して清潔に保っており、村人たちは女性修行者のことを信頼しているという。タアーン族の女性修行者も、タイ語を習得すると、村人たちのことを「養父（ポーレン）、養母（メーレン）」と呼ぶようになる。彼らとの間には擬制的な親子関係が結ばれており、村人たちは機会があれば寺院を訪れ、女性修行者に寄進する。

### タアーン族の住職が招かれる例

少数派ではあるが、文革後にミャンマー側から住職を招いた村落もある。タイ族村では基本的にタイ族僧を招いているが、N村の寺院では居住する出家者全員がタアーン族である。N村でも大躍進・文革期に住職がミャンマー側へ逃亡したため、文革後は住職不在の状況が続いていた。しかしN村は比較的大規模な村落（約250戸）で、葬式や新築式などの儀礼の際に必要な出家者が居住していた方がよいと村人たちは考えたため、ミャンマー側のタアーン族の村にあるO寺院から1997年に住職を招いた。彼らがO寺院から住職を招いたのは、同一教派（メンゾー派）の寺院に属するという事情もあるが、タアーン族の僧侶は戒律を厳守しており、「行いがよい」ことが大きな要因だという。また年配のタアーン僧はタイ語を流暢に話すため、説法する際にも問題ない。こうした理由から、あえてタアーン族の僧侶をミャンマー側から招聘したのである。

タアーン族の出家者にとっても、中国側の

タイ族の村は経済的に豊かで出家者も少ないため、寄進が集まりやすいというメリットがある。ミャンマー側では特に1990年代後半以降、中国茶との価格競争などによって販売価格が下落し、ナムカムのタアーン族の村の寺院は経済的に厳しい状況におかれている。にもかかわらず出家者は多いため、寄進集めに苦勞しなければならぬ。このような経済条件の相違もあり、彼らはタイ族の寺院に居住することを厭わないのである。

### タイ族とタアーン族の相互依存的な関係

以上の事例に共通するのは、民族間の境界を越えた関係が、相互に不足している部分を補うかたちで築かれる点である。出家者の少ない中国側のタイ族の村人たちにとっての寺院管理者、あるいは経済条件に恵まれないミャンマー側のタアーン族にとっての寄進の品々は、相互の仏教実践に不可欠な存在であり、これらに対する必要性が平地と山地に分かれて居住するタイ族とタアーン族の関係をとり結んでいるのである。